

青の楽園

沖縄の那覇から船に乗り、東シナ海を西へ 40km 行けば、そこは 30 ほどの島々からなる慶良間諸島です。船の種類にもよりますが、那覇港からは高速船やフェリーで 35 分～2 時間の旅です。

その景観のきわだつ美しさにより、2014 年に国立公園に指定された慶良間諸島は、断崖、急な山、風が吹き渡る平原、深い松林といったドラマチックさと、砕けたサンゴの砂浜や穏やかな入り江が醸し出す夢のような平穏さを併せ持つ地形を特徴としています。

島々を取り囲む海は、その鮮やかな色でよく知られています。ターコイズや、サファイア、オパール、コバルト、スカイブルーを混ぜた独特の色彩を表現するため、「ケラマブルー」という特別な言葉さえ作られたほどです。慶良間諸島の海水はサンゴや砂、そしてサンゴ礁に住む海洋生物によって絶えず濾過されており、その純度の高さがこの色彩を生み出しています。

慶良間諸島のサンゴ礁はとても特別なものです。日本のサンゴ礁の 60%以上の割合を占めています。慶良間諸島では、250 種近くのサンゴが見られます。そしてこのサンゴ礁が、スズメダイや、チョウチョウウオ、ウミガメ、ザトウクジラを含む多様性に富んだ素晴らしい生態系を支えています。

特に魅力的な 4 つの島

30 もの島々からなる慶良間諸島のうち、人が住んでいるのはたった 4 つの島だけです。中でも最大かつ最も山の多い島が渡嘉敷島です。那覇から一番近い渡嘉敷島は、日帰り旅行者に特に人気があります。海拔の低い座間味島は、心地よく親密な雰囲気があり、よりくつろいだ空気感に浸りたい個人旅行者に好まれています。座間味島のすぐ南にある阿嘉島と慶留間島は、樹々が生い茂る小さな島で、かわいらしいケラマジカの生息地です。

繁栄と悲劇

のどかな遠隔の地であるにもかかわらず、慶良間諸島は歴史の中で、世界的な出来事を多く目の当たりにしてきました。15 世紀から 19 世紀にかけて、沖縄が琉球王国の統治下にあった時代、慶良間諸島は沖縄と中国を行き来する船の中継地点として、役割を果たしました。中国との貿易で巨万の富を得た船乗りたちは、サンゴを彫って作った壁に囲まれた豪邸を建て、現在もその中の一部が残っています。

悲しいことに、こうした歴史的遺産の一部は第二次世界大戦の後期に失われてしまいました。米軍の沖縄侵攻を足止めすることを狙った日本軍の特攻艇の基地であった慶良間諸島は、爆撃を受けた 1945 年 3 月に侵略されました。島民の多くが自決したこの悲劇は、諸島のあちこちに点在する記念碑によって人々の記憶に留められています。

文化の繁栄

こうした大変動を体験したにもかかわらず、慶良間諸島の伝統文化と風習は現在も繁栄し続けています。各村には古来の神聖な場所「御嶽（うたき）」や「拝所（うがんじゅ）」が今も存在しており、海との特別な関係を祝う祭りが年間を通して行われています。その中には、海の神を鎮め、大漁と島の漁師の安全を祈願して行われる沖縄伝統のサバニ（6 人乗りの帆付き漁船）のレースや、昨年中の感謝を捧げ、海上の安全と大漁を願って行われる海御願（うみうがん）などがあります。

陸でも海でも

慶良間諸島には、美しく汚れのない白い砂浜が数多くあります。まずはそんな砂浜に腰を落ち着けて、ほどよく心の準備ができれば、シュノーケルをつけてウミガメや色とりどりの熱帯魚、鮮やかなブルーを生み出すサンゴなどの豊かな海洋生物を探しに行きましょう。冒険好きな方は、スタンドアップパドルボードやボートのツアーに参加して、数多くある無人島のいくつかに行ってみることもできます。

100 ヶ所のダイビングスポットを有する慶良間諸島は、世界最高のダイビングの旅先の一つです。ダイビングやシュノーケルができない方であっても、渡嘉敷島の阿波連港や座間味島の座間味港から出航しているガラスボートの旅に出れば、水中の世界を体験することが可能です。超大型の野生海洋生物

がお好きな方には、冬の時期、慶良間諸島周辺の海域に繁殖と子育てのため移動してくるザトウクジラを見ることができます。船上または丘の高台からのホエールウォッチングがおすすめです。

各島には慶良間諸島のすばらしい眺望を楽しめる展望台があります。また、リュウキュウマツやケラマツツジ、ヤマモモなどの植物を季節ごとに見つけることができる自然遊歩道もあります。

慶良間諸島は、静かで時代を超えた神聖な場所であり、ストレスと現代の喧騒から離れています。青い海や、白い砂浜、緑の丘といった光り輝く原色によって、感性を取り戻せる場所です。ケラマブルーに囲まれば、ブルーな気持ちは吹き飛ばかもしれません！